

だったので静子さんは直ちに髪結い師の免許を活用し、子供を養育し生計を支えた。芸は身を助くの諺のごとくである。

静子さんの生活力旺盛、しかも働くこと即楽しみとする信念、正に男まさりの勇氣と決断の持主である。ただ多情多感の長短相半ばする性格を持ち、子息を自殺に追いやったのは自分だと悔悟し、仏門に入って読経三昧の日々をおくる八十五歳の老婦人である。

(拙引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

満蒙建設を省みて

佐賀県 浦 郷 布治衛

慶應年間前より先祖は、この地に定着して米穀商と農業を営み、私が第四代目に当たり、約二百有余年の家系を伝統的に維持して現在に至る。私は一九〇四年生まれで九十歳になる。まだまだ元気で一人住まいを

しているが、別に不自由とも思わない。

幼少時は、尋常高等小学校高等科二年を卒業と同時に青年学校二カ年を終了。長男のため農業に従事し、水田十三ヘクタールと畑地二十ヘクタールを耕作した。家族構成は年期奉公人も入れて八・九人の大家族で、稼働力も四・五人ぐらゐは農作業に従事していた。私の兄弟姉妹は、男三人女二人で、一応安定した生活を経て、姉だけが小学校高等科を卒業、後に皆当時の中学校を経て各自就職した。当地区は農漁村で約四百戸余り、内六割近くが農業に従事、約四割ぐらゐが漁業経営であつた。自宅は中程度以上の専業農家として平凡な暮らし、当時は文化面も低い実情にあり、部落慣例も現在とは異なり各種行事も案外多く、平凡な近所の交流も繁雑なもので、田舎の方弁でにぎわい、平和な雰囲気助け合つて楽しさもあつた。

大正時代末期ころより米価が下がり、昭和初期ころまで農村恐慌時代となつて、世は正に不況のどん底に落ち入り生活は苦境の状態となつた。六十キロ入り米が四・五円だつたと思う。麦は三円そこそこではなか

ったかと思う。別に収入源となる道もなく、子供の小さい錢も、一錢二錢のお金でも容易ではなかった。もし病気でなるとその病院代もおいと払えず、年末大晦日まで掛けて支払う有様だった。子供時代の思い出として夏は海、その他山野を駆け巡り金のいらぬい単純な遊び方で一日を過ごした。その自由こそ、体力作りの基本となつて体力増進に役立ったのではと、今考えられる。大正十四年は三大義務の一つ徴兵検査もあり、その場では甲種合格であつたが日露戦後の平和時代であり、後日、クジ逃れとあつて予備校編入となり、現役には行かずに済んだので当時は農業だけでは不安定さもあり、もう一度上級学校に進みたい希望もあり、両親に相談した。当時の状況から見て養蚕業が全国的に普及しつつあり、また自宅でも米麦依存から経営面の緩和を計ることとして畑地のほとんどを桑畑と改善し、現金収入のよい養蚕業を計画、当区内でも多数が養蚕家となり、今後大量生産計画もあり、希望は一步進んで県立養蚕学校であつた。二年間の学費は要るが、現在の家計状態で月々の月謝ぐらゐは出る。

受験してみたらのことで県へ問い合わせたら、三月中に入学試験があるとのこと。下準備として講義録なども取り寄せて勉強し、準備おさおさ怠りなく試験日待たす。いよいよ試験日の通知に接して、当日、佐賀市に行き受験した結果、案外優良な成績で合格。学校の規定によつて近隣の者は通学もできるが、遠隔の者は寄宿舎入りとなり、私は寄宿舎、約五十人の内三十人余りが、寄宿舎生活となる。要するに、科目も生物飼いであり、生理学、解剖学初め、そのほか栽桑学など案外科目数も多いし、それを身につけなければならぬ。また実務学習も、実質的養蚕業から絹糸生産課程なども知らねばできない。二カ年間みっちり教養に励み、昭和四年三月卒業、努力の結果、優秀な成績で卒業することができたので就職も決まり、三養基郡北茂安村農会蚕業技術員として派遣され、四月一日付で任地に着いて、初任給四十五円の給料の辞令をいただく。ただいて実務についていたのである。

まず村内の主だった方々にあいさつ回りをすまし、当時の村の実情なども承り勉強させていただき、四月

下旬ころより計画通り巡回指導に当たり、約一カ月間無休で朝早くから養蚕家を訪問指導怠りなく、自転車に乗ってマユになるまで日曜、祭日など無休の状態で働くほかはなく、努力の限りを尽くさねばならなかった。こうした業務に県内各町村に転勤もあり、成績も不評を買うようなこともなく順調に勤め、昭和十二年県内杵島郡農会技手として任官、給料も六十円となり四月一日付けで転任となり、当時上司の仲介で結婚式も挙げ、新婚早々妻を伴い赴任することとなる。当地で一年間新婚生活をなす。

昭和十三年三月中旬ごろ、政府要員として突然徵用令の通知に接し、驚き慌て準備に追われ整理を済ませ、あいさつもそこそこに新婚の夢も覚めぬまま妻を残して、四月一日付けで茨城県友部高等学校幹部候補生として入所したのである。当時の学校長は加藤完治であった。昭和六年盧溝橋爆破事件によって満州事変が起こり、その後、支那事変と拡大され戦争状態にあり、日本国内は騒然として出征兵もほとんど満州などへ送られて行く有様だった。私は満州建国のために幹部候

補生となって、出征兵同様の町民の見送りを受けて入所した。全国より選抜された二百八十人第二期生として入所。県内出身者も八人あり、同志ともども猛訓練に明け暮れた。軍事訓練が主体で、そのほか大陸性気候の教育などがあり、体力増強のための銃剣術剣道などの強行訓練は激しく、朝六時起床とともに筑波山麓付近まで徒歩訓練を済ませて朝食となる。三百六十五日、一日の休暇もなく校外にも出られぬ実情で、約六カ月を終わるころ、友部女子青年団の慰問を受けたとき、目の錯覚か女性すべての異様な感に打たれ、ほう然として見とれたのである。各自手に持っているものは重箱である。それをいただき中を見るとおハギが入っていた。早速食べたらウマイことウマイこと。頭の中にいつまでも残り、忘れ難い慰問品であった。その厚意に報ゆるためには精一杯頑張らねばと、感謝の意を表わして元気百倍と申しますか力づけとなって忘れきれない思い出となったのである。銃剣道共に上達し半年過ぎたころは、都会の学生たちが入所して来たので、これらの教育に当てられ強行訓練を実施すること

となった。当時茨城県内原には、青少年義勇隊も組織され、天地根源造りの兵舎で三カ月内地訓練を実施していた。訓練丸一年間を過ごし、最後に水戸公園まで約七キロの競争があった。私は完全に走り、四、五番目くらいで往復を完走した記憶がある。四月二十日、訓練期間を終わり修了とともに渡満準備となつて帰郷することになる。同郷の森君と帰郷途中、東京二重橋で記念写真を撮り、靖国神社に参拝して一路佐賀へと向かう。県庁に立ち寄りあいさつを述べて自宅に帰る。約二週間の渡満準備に追われ、五月上旬東京麻布青年会館に集合した。会館に滞在中拓務省に招かれた。小磯国昭大臣から、満州建国は日本の国是として、新国家建設への大きな懸案である。アジアの開拓基点の意義ある点を十分に秘めて、第一線兵士と同様、胸の中に納めて奮闘していただきたいとの訓示があった。大臣官房室で祝杯を交わし、山海の珍味をいただき、大臣直々の杯を受けた。

東京を後にして、日本アルプスの山々を眺めながら、国定忠治の赤城山だなどと思ひ浮かべているうちに、

列車は新潟港へとたどり着いたのであった。三日間ばかりの市内見学などあり、渡満の旅は忘れられない。

五月も中ごろいよいよ日本丸に乗船。新潟市民との別れ、女子学生を先頭に多くの人が色とりどりのテープを張り、いつまでも手を振って名残を惜しむのであった。やつと我に帰り、数時間にして佐渡が島が見え、東端のあの灯台が、日本との最後の別れかといつまでも上甲板より離れがたかった。佐渡が島もこれでお別れになるやもと戦友と語らい、船内に入つたり上甲板に上つたりした。夜に入ると満月煌煌と晴れ渡り一点の雲もなく、荒波をけつて船は進み日本海横断、四十八時間にして朝鮮元山港へと着いたのである。

関東軍差し回しの列車に乗り込み、北朝鮮を通過し、豆満江を渡り、いよいよ南満州へと入り広漠原野は開け、初めて見る大陸の原野を列車は進むのであった。戦友との語りもそこそこ、とうとうやつて来た。無停車で列車は進み、鞍山製鉄所の高い煙突からはき出す黒煙は、もうもうと南満の空高く流れている。南満の広野は限りなく広がり、耕地は既に蒔き付けも終わり、

この大地に骨を埋めるか生還するかは別として、決意は新たな思いがするのみであった。列車は北へ北へと進み、奉天駅は夜となり通過。次は首都新京駅でちよつと停車時間もあり、中隊長の指示によつて下車して表に出てみれば、駅前は大々として大きな道が南に向かつている様は茫然として見るばかり。話によれば大道大街と呼ばれ、道路の幅は百メートルもあろうかと思つた。日本国道とはけた違い、人はまばらであつた。再び車上となり戦友と様々な話の内に眠つた。翌朝は、稜線より立ち昇る太陽を見ながら北滿の広野をひた走つていた。その間、朱塗りの双城駅の駅舎をちらつと眺めて通り過ぎ、約一時間余りで目的地北滿の大都市、ハルビン駅へと到着。

とうとうやつて来たなと心を引き締めて中隊長の号令で列車から降り、駅ホームのガラス箱の中に安置されている伊藤博文公に恭しく敬礼をして駅表に出て見ると、ニレの古木が若芽を出し、その木々の中にロシヤ住宅が立ち並び、屋根の上には煙突が二本突き出たわすかに煙が立ち上り、その風景のエキゾチックな感

に打たれるのであつた。約二時間くらい駅付近に散策して、訓練所より差し回されたトラックに分乗して北滿の大広野をひた走り、やつと着いた所はハルビン特別青少年義勇隊大訓練所であつた。当時の訓練所長は飯島次郎閣下であつた。早速訓練所広場に集合点呼を取つて、私は第二中隊付職員として兵舎も二号の一番と既に割当てもできていたので、まず軍刀を壁に立てかけてそれに拳銃が一丁渡され、翌日より二中隊二百人の前で着任のあいさつを済まし、中隊長の補佐役として勤務することとなる。

当時、現地訓練を受けている者、約一万人といわれていた。ほとんどが軍事訓練を主体として実践体制により実施させられ、その外は自給体制をもつて、軍事訓練の外農作業を取り入れて、除草器を肩にして農業に従事することであつた。北滿の広野は限りなく稜線のかなたまで一望千里の観あり、一枚の畑に一列横隊で一畝を受け持つて除草に専念、一往復すると既に半日はかかる有様で、広漠原野人影もなく、夕暮れともなれば、大きな大きな真つ赤な太陽がかなた稜線に

沈む。まさに大陸の絵を見るようで、その太陽はいつ

までも頭の中に残り忘れられない。終日訓練、農作業などを終えて夕食となれば高粱の入った米との混合食を取り、午後九時消灯とともに眠りにつく。非常召集のベルが鳴り、屯子に匪襲とのことで訓練生を集めて隊伍を整え、小銃と実弾五個を着装し、点呼を取り屯子へと行くことも度々であった。夜も安眠できない有様で、一日一日が緊張の生活でもあり、やっと三カ月勤務も終わり訓練生一期が過ぎたころ、私は左腕がつまり上がり伸ばすこともできず、食事も他の者に手伝わしてもらい食べるような状態となった。医務官の検査の結果、ひどい風土病と診断され宿舎で休養するよう命ぜられ、幾日経っても治らないので、内地療養の外なしと思ひ郷里に帰る。

内地はお盆祭りとおつて早速地元の病院に行き診察の結果、大陸性風土病と診断され通院を始めた。約一カ月も経ったところは体調もよくなり健康状態に復帰。そして満州国興農部稲垣征夫技官より、再渡満せよとの電報を受け取り、再び町民の見送りを得て再渡満の

旅に出る。

途中新京の興農部に出頭、当時興農部次長は、岸信介閣下に面接、稲垣技官立ち会いの下で了解を得て飯島所長に報告に面接したら、約二カ月近くも休んだので後任もできている。浜江省興農合作社連合会に配転することになっているのでそちらの方に行くようにとのこと、早速興農合作社連合会に出頭して勤務することとなる。浜江省一市十二県の特任任務となり、宿舎はハルビン憲兵隊宿舍同宿。当時宿舍より勤務、それとともに憲兵隊事務所にも出入り、人事関係で在郷軍人関係並びに警視庁赤札つき日系職員関係など、まる秘調査などもあり、満州建国とともに日支事変も拡大の一途をたどり、米英仏の東南アジア圏を植民地化しつつある秘密関係も多く、昭和十五年には興農部の指令によつて、金融合作社と農事合作社が統合され、興農合作社連合会と改められる。浜江省管内一市十二県の人事関係一切を握り、連合会理事長室付人事係長として勤務することとなる。

兵役関係を主体として在郷軍人関係では、極寒三〇

度の寒さをおして、ハルビン神社の広場で銃剣術の教育なども負わされた。左傾主義者の取り締まりなど案外公用も多く、当時連合会社新築工事も進み、同事務所の内に宿直室もできており、一人世帯だから宿直住まいにしてはとのこと、憲兵隊宿舎より移転する。宿直室に移り、その間、俵樹街に官舎もできたので、再び移転と同時に内地の妻を呼びよせることにした。

一番寒い一月十日、妻が一人旅でやって来た。長い別居生活から再び新生活となり、気持ちも改まる。この官舎には約一年ぐらい。その後奉天街の大きな官舎に移り、次女はここで生まれ、約四年間住んだのである。その間昭和十六年十一月四日、突然赤札つき職員が憲兵隊に拘束され、その中に興農合作社の理事級の人もおり、地下室に入れられ面会は禁止、憲兵隊より通報に接しただけ出入りしてよいとのことと致し方ない。食事など私の手を経て地下室へ運ぶ。絶対他は入れない実情であった。彼らの管理は一切私に責任を与えられ、昭和十六年十月ころ、内地へ護送することになった。

昭和十六年十二月八日、特攻隊によりハワイ米艦隊急襲となつて、第二次世界大戦布告、米英仏との戦争状態となる。日本軍は意気軒昂で南方戦線も拡大されていくばかり、満州国内も一層緊張度を増し、食糧基地としての使命も重大となつた。日本軍の意気ますます盛んとなり、南方戦線にがい歌は上がり、拡大の一端をたどるうち、ミッドウェー海戦において日本艦隊は敗れ、敗退の色濃くなる有様であつたが、その戦線は玉碎など容易な事態ではなかつた。

昭和十九年七月一日付けで興農部辞令に接し、巴彦興農合作社理事として転勤になる。当県は馬占山の生まれ故郷であり、排日抗日の思想的に他県とは異なり、そうした事情下にあつて満系職員の指導は容易ではないことも一応分かつており、十分この点を考へて指導していかねばと常時その点に留意し、指導体制を整えて民主的方向に日系満系の区別をなさずに行くこととした。当県は人口三十五万人、また巴彦街は四万の住民が生活しており、そのうち日系は百五十万人ぐらいであつた。巴彦県は北満の大県でもあり支社も交

易場も各地にあり、農産物の出荷量も浜江省管内第一位で、業務も案外多く、多忙の日は続くのであった。

官舎には理事長と自分の家族が入り、二女も生まれ、

親子四人とタイピスト一人が同居で、五人家族一応安定した生活はできたが、昭和二十年七月一日付けで現地応召の赤紙に接し、第四軍管区ハルビン独立混成旅団三三、六〇七部隊に入営することになり、出征の当日は、ハルビン市キタイスカヤ街公園で訣別。郷里の両親のことが脳裏に浮かび、応召を受けた以上生きて帰れるかは計り知る由もなく、異郷の地で三歳と一歳の子供を抱えて、留守を守る妻を思うと、訣別は涙も出ぬほどの悲壮な思いで、親しくしてくれた中国人、姜剛田と王綿併の厚意に依存するほか道もない。当時記念写真をとって訣別したのであった。

入隊して約一カ月後、昭和二十年八月八日、ソ連軍は不可侵条約を一方的に破棄して、重戦車三百台で牡丹江と満州里方面より満州国に侵攻破竹の進撃をなし、我が旅団も同年八月九日午後九時、出動命令を受けてドシャ降りの雨の中、原隊を出動、真つ暗な闇の中、

ソ連軍の重戦隊と交戦、防御の道なく、重機ぐらいは効果もない有様、兵隊も流弾に倒れ敗退する外はなぐハルビンへと逆戻り。

時既に八月十五日夕方ハルビンに着いたときは、日本軍の無条件降伏のラジオ放送後であった。一応桃山小学校に入り八月二十三日武装解除となり、市内居住者は直ちに軍服を脱いで自宅へ帰ってもよいとのことであった。もはや日本軍規もないとの中隊長との言葉であったが、私は巴彦県であるゆえ、隊と行動する以外仕方なく、一応部隊は阿城県集結となり、中隊長の話では、シベリア抑留でウクライナ収容所ではないかとのことであった。各部隊は無蓋車に乗せられ、各収容所へと送られていく。我が部隊も海倫まで行くと、第四管区十万の兵が集結、約二十日間ぐらい滞在して再び無蓋車に乗せられ、進行するのであった。戦友岩崎上等兵とウクライナ収容所に連れて行かれたらいつ帰れるか全然不明であるから、興安嶺付近で停車したら部隊と離れて逃避行で逆戻りしようかと話をしたところ、それもよからう、隊と別れた方がよいかもしれ

ないと話は一決し、途中停車することがあったら逃亡する、ことにした。

一面披では停車しないので興安嶺まで行ったらと期待していたら、興安嶺の麓のヤブリという小さい駅でいったん停車となり、「よし、おれは降りる」と汽車より飛び降りたところ、岩崎も降り、その外におれもおれもと飛び降りる者十人となり、中隊長に許可を取り隊との別れとなった。中隊長の話では、部隊と別れたら、自分の生命は自分で守らねばならない。一面披まで行くと汽車があるので十分注意して行ってくれ、とのことではいよいよ十人一体となって歩くこととなったのである。どれくらいの距離か不明だが、小興安嶺まで行けば大体分かるからと大興安嶺の白樺の大木が天に沖おきしている中を進んだ。戦車の通った後は案外楽に歩けたが、興安嶺の大狼はどう猛なので各自棒を持つこととして、大狼の予防に心したのであった。興安嶺の山を出たら草原地帯となり、屯子があれば変装しよう。軍服ではもしソ連軍に見つかれば銃殺されるかも分からないからと話をした。やっと屯子が見えたの

で満服と交換しようと屯長に相談したら、早速満服十着を集めてきてくれたので、軍服を脱いで交換。まだ陽はある。歩こうといろいろ話しながら急ぎ足で歩いたら、一同腹が減って何か食べたいと包米畑に入り、包米を生で食べたがそう簡単には食べられない。入るだけでもよいかからと各自二つ三つ手にも握り、また歩き出した。

いよいよ夜に入ると、方角も明らかでないが、戦車の通った道からはずれぬようにと注意するのであった。夕方になると必ず夕立が降り、夜間となり高粱畑に入って眠る時間も欲しいので十人集まってよく見ると、蚊の大群が押し寄せ、これまた大変、眠れる段ではない。また雨でもざーっとくると蚊の大群は逃げてしまいうけれど、なかなか眠ることは不可能。それよりも歩いた方がよいということで、睡眠不足は覚悟の前、昼時広野の中でちよつとの睡眠をとるのであった。また腹はペコペコで生の包米も食えない。ただ水だけはどうにか通るぐらい。睡眠不足とともに、だれも元氣な足取りではないが、我慢して歩くよりほかはない。自

分も現地に残した家族のことを思えば、どんな苦しみも乗り越えて、ハルビンに行けばどうにかなる。小奥安嶺まで来た以上、もうひと辛棒して一面披に着くまでは元氣を出さねばと、頑張ってはいるものの腹はペコペコ、睡眠不足ともあつて頭はふらふらで気概はあつても容易ではない。二昼夜歩き続けてここまで来た以上、もうひと辛棒だと仲間を励まし、やっと三日目となる。

この日は天気もよく晴れ間もあり、元氣を出して一刻も早く一面披に着くことが何よりと、望みをかけて元氣づけるのであつた。夕方になると、また通り雨である。大きな道に出たので、一面披もそう遠くあるまいと元氣を振りしぼり、夜になると手を取り合つて闇の中をとぼとぼと歩く。またもや雨が降ってきて、ずぶぬれの有様であるが、お互いに元氣を出そうと、苦渋の限り歩いてきた。少し坂を登つたら、一面披の明かりが見えたので、一同元氣を出したその瞬間、「ダワイ、ダワイ」と十人ばかりのソ連兵が、銃剣つけて取り巻き捕虜となる。その間、彼らも銃剣は肩に立て

掛けて、煙草を吸う有様で、我らもその煙草がほしくなり、岩崎君が煙草をくれないかと相談した。「ハラシヨ」と言つて、各自に一本ずつくれたので火をつけて煙草をすつてうちに、岩崎君が、「ソ連兵が油断しているので逃げよう、この闇の中、合図するから」と案を出した。その合図とともに、一同は散つて逃げたが、私の靴がぬかるみに入り、手をついたところへ一兵士が来て捕まり、手錠をかけられ車力につながれたが、外の者は一体どうなったか、銃弾に倒れたかもしれない。自分一人が捕虜となつたのである。終戦直後のことゆえ一面披の露と消えるのかと、現地に残した家族のことが頭から離れず、三日三晩の食もとらずどしゃ降りの雨の中、下士官幕舎に銃剣つきつけられ引き回されて、また元の車力につながれ死も同然の有様。雨が止めば蚊の大群が容赦なく襲い、かゆくてもうにもならない。どうせ命はない運命とあきらめ、死を覚悟してその苦痛に耐えなければならなかつた。斬殺か銃殺か、暗やみの中、手首、足首などが動めく、また、天高く十字架などが見えたり、そうしているう

ちに眠つたのであろうか、目を覚ましたときは、既に翌日午前八時ころだったと思う。

もうろうとして自分はまだ生きているなど茫然としているところへ、一人のソ連兵が紙包みを両手に持つて来て、手錠をはずしこれを食べと置いて帰る。その紙包みを開いてみたら、元日本軍のカンパン二袋と砂糖百グラムぐらいであった。どうしても食う気にならず、タオルの両端にそれを包み、歩哨の監視下で土下座していた。午後二時過ぎごろ、司令官の呼び出しで銃剣付けた兵隊五、六人が来て、前後歩哨付きで長い廊下を通り抜けると。広い家の内に一人の将校が腰を下ろして待っていた。白系ロシア人通訳と三人の司令官から、どこから来たか、また兵隊ではないのかなど尋問あり、開拓団員で出張しているとき、終戦となり、団に帰つたら団員は既に離れた後で、どうにもならず歩いていたら捕われたと回答。今回は銃殺にはしない。また捕まったら銃殺にする。ここの公園の向こうに日本人がたくさん収容されているからそこへ行け、と町に放免されたのである。命運を得て街に出てみた

らロシア婦人に出会い、公園へ行くのはどう行けばよいかと尋ねたら、この先の高架橋を上つて下方に向かつて歩いて行つたら公園がある。そのずっと先に大きな家があつて、そこに日本人がたくさんいると教えてくれたので、そのとおりに歩いて行つたら大きい家があり裏門から入つたら、夕方近くなつていたが、大きな釜の下に火があかあかと見えていた。そのとき、向こうの方より大声で、「浦郷君ではないか、今ごろ一人どこから来たのか」と近づいたのは、元幹部候補生の田中君であつた。うれしさのあまり涙が出るばかり、言葉が出ない。もう泣くなど論され、今までの一通りを話した。一応部屋に行つて服などを持つてきてくれた。また夕食のニギリ飯も持つて来るからと地下室に下りて行き、大きいニギリ飯二個いただき、落ちて着くことができ、やつと我に返る。

当分この収容所で暮らしているうち、ソ連の将校がやつて来て命令により牡丹江収容所に移動することとなる。二昼夜にして北滿の三江平野を通り、牡丹江収容所に着く。その内に、関東軍倉庫の物資を、二十四

時間態勢で送り出す使役に服し、全部シベリア送りを済ました。

既に十一月中旬ころとなり、解放され十一月十七日、ハルビンへと戻れたのであった。ハルビン地段街で馬車から降りようとすると、向こうの方から、「浦郷さん、貴男の奥さんも後ろの方から来ておりますよ」と声をかけられた。妻子との再会、全く神仏の引き合わせか、奇跡的な巡り会いとなったのである。三女だけ巴彥県収容所で栄養失調で亡くなったと、妻より聞かされ興農会館へと行く。ここも立錐の余地もなく座して眠る有様。毎晩発疹チフスと栄養失調で、子供はほとんど死んでいく。折しも郷土の知人鳥巢さんがみえて、「こんな所にいると死んでしまうから、我が家へ来ないか」と、誘われて鳥巢さんの家に落ち着いたのである。

昭和二十一年八月二十三日、ハルビン第二陣引揚げとなり、コロ島から七千屯の船、神祐丸乗船。ハルビン駅を出てから約五十五日間で祖国日本に着き、秋のさわやかな季節、佐世保南風崎港はよのさきに上陸したのである。

着のみ着のまま乞食といえどまだひどいもので、満服一枚何一つ持つてゐるものもない。裸一貫で祖国復帰となった。何がこうさせたか。戦争そして敗戦の結果である。この惨めな運命を省みて、戦争だけは絶対に起こしてはならない。多くの人の命を亡くして、人権の尊さを知ったのである。

かくして戦後復帰後の苦闘はあったにせよ。両親もまだ健在であつたし、ただ無我夢中で農業に従事、別に取り立てて申し述べるまでもなく、食料増産というイメージのもとにあり、北滿の終戦直後のあの苦難の道を、生きて祖国に帰り着いたことが、何よりの尊い生命の存続ではないでしょうか。戦後もはや五十年にもなろうとしている現時点での平和への道が、一層進展していくことが取りも直さず、人類の生き甲斐と幸せへの最大の道義にかなうこととなり、満蒙開発に挺身し死線を幾度か乗り越えて命運あり、現在に生きていることが不思議な思いさえ起こるぐらいです。

妻は、昭和四十一年四月二十二日、まる一年の入院加療の甲斐もなく、五十歳という短命でこの世を去つ

たのであった。北滿の広野で敗戦後の苦闘と、私有財産全部を置き去りに命からがらの逃避行、三女を栄養失調で亡くし、二女と共に異郷の地で命運あつて再会。祖国に帰りやれやれと思つたのも束の間、病魔に取りつかれ、根限りの手当ての甲斐もなく、この世を去つたのである。子供三人を結婚させるまではと、再婚など考えたくもない運命の限りを尽くして、意義ある人生を送るためにはやむを得ず頑張り通し、孤独三十年の現在、三人の子供たちもお陰様で人並みの生活を築

き上げ、孤独の身の不自由など考える必要もなく、安定感に徹し健康一途を念願として自由な立場で毎日を送ることがむしろ幸せと考えている。老人クラブ会長も長年つとめ、区内のリーダーとして社会貢献も推進してきたが、九十歳の現在、まだまだ社会参加にも他にも遅れじと、健康保持に留意し、百歳を目標に生きて生きたいと願うものである。

【執筆者の横顔】

浦郷家は慶應年間から佐賀県山代町久原で農業を営

み、地方の素封家で、布治衛氏はその四代目である。浦郷氏は地元の県立養蚕学校を卒業し、当時の村役場の技術員、その後郡農会の技手に任命され、地方農業発展に実力を発揮していた。

時あたかも滿蒙開拓の大事業が国是として発表なるや、浦郷氏はそれに呼応し、自らその天業に参画したいものと血潮をたぎらせていた。昭和十三年、政府要員として、茨城県友部訓練所に全国から選抜した青年二百八十人が入所となって。一年間の猛訓練をうけて滿州に渡つた。その中に浦郷氏が入り、滿州の各機関団体に勤務へと散らばつた。

浦郷氏は滿州国興農合作社に採用となり、人事係長に任命された。同十九年巴彦県興農作社理事に就任し、民族協和運動と併せ県下農産業の指導者となつて、近代化による指導と増産運動に精力的に努めていた。

昭和二十年七月、突如兵役に応召となつたので全職員に後事を託して訣別のあいさつをする。牡丹江出動し戦線に参加した。しかしその翌月の八月に日本敗戦となる。敗戦となつても身は軍人の浦郷氏は死を覚悟

していたものの、くしくも妻子と再会し、昭和二十一年八月二十三日、一千人の引揚者の隊長となつて、食うや食わずの丸裸であるが、たった一千円の所持を許されてコロ島から乗船、現在地の山代町久原の我が家に引き揚げてくれた。その後、両親、苦勞を共に生きて来た妻を亡くしたが、残された三人の娘をそれぞれ嫁がせた。幸いに健康に恵まれ、みんなから慕われて引揚者団体県連の代表、老人クラブ会長として活躍されている。

(出引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

泣き夫の姿を臉に浮かべて

鹿兒島県 松元ヒナ

昭和二十年、満州国安東省鳳凰城の春三月、外ではボタン雪が舞い降りしきる杜宅の二重ガラスの窓ぎわに立っていた。三歳の輝男は一人で雪を眺めながら遊

んでいた。私と夫は朝食、ささやかながらも我が家一家は幸せだった。輝男にふと目をやれば、オシッコを垂らしている。「輝男ちゃん、オシッコしたの」「これ母ちゃん、ヨダレよ」三歳の子でも恥ずかしかったのか、オシッコじゃない、ヨダレよと片言で返事をしているのです。私は主人と顔見合せて笑いました。こんなかわい子産めた母となれば喜びです。戦はあつても、直接我が身に迫らない。それでも絶えず緊張している毎日でした。勤務時間になり出されたのか、鳳凰城郵便局の横では、主人も近ごろよく鉄砲持つて戦のけいこをしていました。両手で鉄砲を上にあげて、背なでにじりよる。あれは「匍匐前進」というものだと、あとで主人が教えてくれました。いよいよただならぬ気配、戦はすぐそこまで迫っていました。

「おいおい、長期出張だぞ」「また、だれか代わりにの独身男性はいないの」、すると「これだよ」主人が見せてくれたのは、初めて見る赤紙召集令状でした。終戦間近い二十年五月の朝です。そのころ身障者でない限り、男という男は皆召集されて行きました。私の